★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第12回

テルマエ・ロマエ

1．　マン・デート
一日だけお父さんになった日

8月の初め、大学の授業の採点がすべて終わった。4月から7月までの4ヶ月間、殺人的な忙しさで、自転車操業状態だった。やっと、これからしばらくはのんびりできる。何か楽しいことが起きればいいけどなあー。暑い夏の昼下がり、そう思いながら、ぼくは最寄りの駅から歩いて帰宅しようとしていた。

すると自転車に乗った若い男性と目があった。「あ！」ぼくが専門学校で教えていた頃に、教えていた男の子だった。彼は、専門学校から大学へと編入し、卒業して、今は中学で先生をしているということは知っていた。

彼がぼくのことを好きだということは、他の女の学生に聞いて知っていた。先生という立場上、彼らが学生の間はFACEBOOKの友達にはならない、とぼくは教え子たちの友達リクエストを断ってきたのだが、彼は卒業した直後に、ぼくのところにリクエストを送ってきた。早速送ってくれるなんて、やはり俺のことが好きだったんだなあー、と嬉しかったものだ。とはいっても、もう会うことはないと思っていた。友達承認はしたのだが、就職すると忙しくなるし、忙しさに紛れて、昔のことは忘れていくだろう。FACEBOOKも、この頃はだんだんと廃れていて、LINEにとって代わられようとしている。人は、ぼくの人生にやってきては去っていく。人生なんてそんなもんだ。もう会うこともないかと思っていた矢先だった。

しばらく立ち話をした。そして、一緒に飯と風呂に行こうかという話になった。善は急

げで、さっそく、その夜、桂の仁左衛門風呂に行き、しゃぶしゃぶを食べ、締めにラーメンを食べて別れた。息子と二人で語り合ったような気分だった。彼も大人になったなあ。俺は年をとった。感慨無量だった。一日だけ父親の気分を味あわせてくれた彼に感謝した。

２．　マン・デート
海パンおじさんになった日

思えば、去年の夏も楽しかった。

去年は、普段、身体のメインテナンスをしてもらっている男性と兵庫の須磨海岸に行った。若者の海だと聞いていたのだが、朝行ったせいか、意外に人は少なかった。たっぷり、ふたりで海岸を歩き、海に入ってプロレスごっこをした。楽しいなあ。俺はずっと、こういう男同士の関係に憧れていたんだよなあ。

人前で裸になることの羞恥心は、その時のモード次第だ。温泉で裸になるのは一番当たり前のことで、温泉の場合は女性の目がないこともあって、それほど気にならない。海やプールの場合は、女性から見られる場合がある。男だから恥ずかしくないかというと決してそんなことはなくて、意外にいやだと思っている人は多いはずだ。

一昨年も、当時親しかった飲み屋の仲間たちと宮津の海に行った。海に入るだけではなく、天の橋立を見て、温泉に入って、美味しいものをたっぷり食べて、花火を見て、目いっぱい安い宿屋に泊る、若い時代に戻った気分で夏休みを謳歌しようという目的だった。男６人くらいで、女性が４人くらいだった。女性たちのほうは、温泉は入るけれど、海には最初から入るつもりはないと水着ももっていっていなかった。女性だから日焼けが困るというのもあるのだろう。男たちのほうは、一応、海に入ると言っていた。「男子だから、見られて困るところなんてないも〜ん」と小学校くらいの男の子のまねをして、ふざけていた人もいた。ところが、いざ、海水浴に行こうかという段になると、実際に海水パンツになって海に入ったのは、ぼくが親しくしている男性とぼくの２人だけということになった。ほかの男性たちは、また後で合流しようと、何か他の観光を楽しむために車でどこかに行ってしまった。

結局、みんな恥ずかしかったのかもしれない。海水パンツ姿になることが。これは男でも正常な反応なのだ。学校とかでは仕方がないから皆脱ぐだけのことで、上半身裸になることが恥ずかしくないという男性は、強がっているだけのことである。何年か前にレスリングをやっている男性が、「レスリングって、あんな格好をさせられるから、それが恥ずかしいんですよ」としきりに言っていた。そして、写真を見せてくれた。「あれ、昔はもっと恥ずかしい格好だったんじゃないの？」とぼくが言うと、「えー、昔は乳首見えてましたもんね」と彼。今のレスリング着も、身体に貼りついたようなものではあるけども、乳首は見えないようなふうになっているのだということをその時初めて知った。そういえば、ボクシングも、プロは上半身裸だけど、アマチュアはランニング着用になっている。昔に比べれば、男性の性的羞恥心は認められるようになっているのかもしれない。

須磨海岸では、写真もたっぷり撮った。この年になって、あれだけ海水パンツ姿の写真を撮るとは思いもしなかったが、あれこれポ

ーズをつくりながら、何枚も写真をとった。結構よく撮れている。「海パンおじさん」というゆるキャラで売り出そうか、と冗談で話した。可愛い雰囲気に撮れているのだ。

他の海水浴客の人に頼んで、彼と並んでいる写真も撮ってもらった。彼は、まだ３０代だし、スポーツマンなので、見事な筋肉質の身体なのだが、その彼と並んでも、別に俺は遜色はないなあとか思ったものだ。もちろん、筋肉では彼に劣っているけれど、俺は身体の横幅が大きいので、それなりに裸がさまになっていた。宮津に行った頃は、もっと太っていたので、その時海パン姿で撮った写真を今見ると恥ずかしくなる。よくこんなお腹が出ていて、それを写真に撮ったものだと思ったりもする。でもあの頃は、あれが普通の状態だったので、気にならなかったのだった。４０代の後半にもなれば、見苦しい身体の人のほうが多いんだから、これくらいいいかと思っていたのだった。しかし、いったんダイエットに成功して痩せてみると、昔の身体が無様に見えて、せめてもっとかっこいい海水パンツにしときゃよかったとか思ったものだった。

須磨海岸ではビーチボールを買って、海で遊んだりもした。男二人の裸の戯れをたっぷりと堪能させてくれた、彼に感謝したいと思う。

３．　マン・デート
もろゲイ！？になった日

去年の夏は、ほかの男性と川遊びにも行った。

その時も、男２人で、海パン一枚になって遊んだのだが、その時撮った写真をＮ先生に見せた。

「もろゲイじゃないの」とＮ先生。

２人で並んだ写真を撮ってくれそうな人が周囲にいなかったので、２人で身体を寄せて、自分たちで自分たちの写真を撮ったのだが、彼とぼくの裸体がぴったりくっついてアップで写っているため、ゲイにも見えてくるのだ。

「いや、２０くらい年が違っているし、親子みたいな雰囲気ですよ」とぼくは話した。

あの時は、２人で川の流れを見ながら、小さなバーベキューをした。彼もとてもいいやつで、親子ほどに年が違っている人とも、なんのこだわりもなく、つきあえる人だった。この時もたっぷり男同士の裸の付き合いを堪能した。

彼は、今年の２月のぼくの誕生日にはケーキを焼いてくれた。いまは料理好きの男性は着々と増えていて、ぼくの知り合いの女性なんかは、「私は結婚する前は料理していたんだけど、結婚してからがしなくなっちゃったのよ。彼が料理するの好きだから」と話していた。彼が焼いてくれたケーキはプロテイン・ケーキ。ぼくはマッチョになりたいと常日頃言っていたので、細マッチョの彼は、そのことも考えて、プロテイン入りのケーキを創作してくれたのだ。美味しかった。彼にも感謝だ。

４．　マン・デート
わだかまりを打ち明けた日

８月の上旬、用事があって東京に行った。

せっかくだから、東京の友達にも会っておこうと、まず以前、京都で暮らしていて、今

は東京にいる３０代の友人と会った。彼は博識で、頭が切れる。いつだって、思わぬ刺激をあたえてくれる。

読書家で、精神分析の本もたくさん読んでいるので、実は、今年の５月、思わぬ経験をすることになったのだと彼に話した。ぼくの知り合いの先生経由で、ある九州出身の女性カウンセラーと会うことになった。この連載にも書いてきたとおり、ぼくは九州に偏見をもっているし、女性恐怖症だ。これまでカウンセラーには何人もついているけれど、まだその部分は解決できていない。それで九州の女性から自分を理解してもらえれば、偏見も解けるのではないかと考えていた。しかし、逆に偏見を強める結果になってしまった。

ぼくが彼女に話したのは、男性差別の問題。具体的には、学校時代の体罰、半裸の強制、スポーツ問題である。これらは基本的な男性問題で、この援助マガジンでも何度も書いているし、援助学会の大会でも話したことがある。男性差別のブログやサイトなどでも必ずとりあげられる問題である。ぼくは、援助学会の発表のときは、まずＮ先生に内容をチェックしてもらっているし、よほど一般の人に伝わらないような問題は、Ｎ 先生がカットしてくれる。決して特殊な問題ではないはずなのだ。

ところがこの女性カウンセラーは、ぼくの話に戦々恐々とした様子だった。「先ほども男の人が来られていたのだけど、その人の話はすごくよくわかるんです。でも、あなたのはわからない」彼女は、本当に困り果てたような顔でそういうのだ。

ぼくは、彼女にまず体罰のことを訴えた。小学校の時、３年間担任だった女の先生が男子にのみ厳しい体罰を与えていたということを。すると彼女は、「でも、あなたが殴られたわけじゃないんでしょ？」と返してくる。「でも、ぼくはいつ殴られるかと思って、いつだっておびえていました」とぼくは訴えたのだが、それでも彼女はキョトンとした顔だった。次にぼくは、中学の時、番長のような体育教師から真冬に上半身裸で体育の授業をやらされていたことを訴えた。すると彼女は、「上半身裸になるのが好きな男の子もいるじゃないですか」と返してきた。さらにぼくはスポーツができなかったことも訴えた。「ぼくはのび太みたいな男の子だったんです」と。すると彼女は、「のび太くんも、静ちゃんと結婚できたじゃないですか」と笑顔で返してきた。

彼女は、おそらく男性差別の問題を考えたこともなかったのだろうし、ぼくのようなことを訴える男に出会ったこともなかったのだろう。したがって、男性ジェンダーの問題で悩むことがピンとこないのである。さらに、ぼくは、「ぼくは、自分と同じ経験を共有できる男性がいないことがつらいんです」と訴えた。すると「上半身、脱がされたことがですか？　でも、その時一緒に脱がされていた男の子たちがいるじゃないですか」と返された。俺は、そういう意味で言っているんじゃない。俺は、そのことで悩んで不登校にまでなってしまったんだ。しかし、他の男の子たちはジェンダーを受け入れているから、そのことで俺ほどには傷つかず、普通に人生を歩んでいったんだ、だから俺と同じように男性ジェンダーをどうしても受け入れられなくて悩んだ仲間がいないことがつらいと言っているんだ、しかし、彼女にはまるでそれが伝わっていない。

「好きで男っぽいことをするのと、先生に強制されるのとでは別なんですよ。女の人だって、好きな男の人とセックスをするのと嫌いな男から無理矢理レイプされるのとでは違っているわけでしょう？」「じゃあ、逆の場合だったらということを考えてみてください。例えば、女子ばかりが殴られて、男は絶対に殴られないという状況が３年も続いたとして、あなたは何も感じないんですか」とぼくは熱く彼女に問いかけた。しかし、彼女は、困惑しきった表情で、ぼくを理解しようと一生懸命考えてはいたのだけども、どうにも理解できない様子だった。

やはり、俺は変な男なのだろうか。

彼からは、「まあ、國友さんみたいなことを訴える男の人って、俺の周りでも他にいないですからね」と言われた。そう、彼女のほうは悪気はなかったのだろう。カウンセラーだって全能じゃない。ぼくは１５年前にあるフェミニストカウンセラー（ジェンダーカウンセラー）についたことがある。ジェンダー意識のないカウンセラーだと、「男は男らしく、女は女らしく」というメッセージを送って来る。だけど、ジェンダーで苦しんでいる人だとそういうメッセージは逆効果。だからこそ、ジェンダーの視点からのカウンセリングが生まれたのだとおっしゃっていた。

おそらく普通の男性たちも、先生から殴られたり、強制的に半裸にさせられたりしたら、傷つく男のほうが多いはずである。これは確信をもって言える。しかし、ぼくみたいな極端な男根主義教育を受けた人はマイノリティだろうし、多少、ジェンダーを理不尽に感じることはあっても、仕方がないと男性ジェンダーを受け入れている。他のやつもしているんだから仕方がないと受け入れて、どうにか思春期の多感な時期を乗り越え、大人になっていく。そして、大人になると少年の時のことなどは、粗方忘れてしまうのだ。

ぼくは男として挫折する時期が早すぎたのだろう。10 代の頃の 1 年間は大人になってからの 5 年間に相当するという話を聞いたことがある。思春期の時期に心が壊れた僕は、大きなハンデを背負い、50 になった今でもトラウマに苦しみ続けている。

ぼくがジェンダーを受け入れられなかったのは、生来、スポーツが極端にできなくて、発達障害で、男の規範に合わせようにも合わせられない規格外の男子だったからである。ぼくが曲がりなりにも他の男の子集団に 1 歩遅れてでもついていけるような資質をもって生れていたら、俺だってジェンダーを受け入れていただろう。しかし、1 歩どころか、1 千歩も 1 万歩も他の男子たちと違っていたぼくは、どうしてもジェンダーについていけない。だからジェンダーを憎むことになってしまったのだった。

彼女とのカウンセリングはすぐに打ち止めとなった。やはり、ぼくは九州とは相容れない何かをもっていたのだと思った。俺は九州とは縁がないんだ。そう思うしかない。

九州はぼくにとってトラウマの地。からゆきさんとして売られていった老女（田中絹代）が、彼女を取材しに来たライター（栗原小巻）に自分の若い頃を語っていく、『サンダカン八番娼館　望郷』（熊井啓監督・1974）という有名な映画がある。この映画のラストで栗原小巻さんが、「おさきさん、みな、日本に背を向けて眠っとんなはっと」という台詞は有名である。現地に行った彼女は、日本からからゆ

きさんとして売られた女性の墓が日本とは逆のほうを向いて立っていることを発見するのだ。もちろん、この台詞は彼女たちが日本に背を向けていることを批判してはいない。それくらい彼女たちは悲しい思いをしたのだということ。そして、自分を売った日本を憎むことでしか自分を支えられなかったのだということを示唆しているのである。

そうだ、俺も九州に背を向けて、生きていくしかない。俺は十分、九州で悲しい思いをしたのだから、背を向ける権利くらいあるはずだ。世間の人は、男が半裸を強制されたり、殴られたりするくらいのことが、からゆきさんに匹敵するほどのトラウマなのかと思うかもしれないが、俺にとってはそれに匹敵するトラウマだったのだ。

「俺はこの頃 N 先生と親しいけど、N 先生はある程度はわかってくれるんだよ。結局、俺は誰か理解して欲しいんだよね」とぼくは彼に言った。

「じゃあ、いいじゃないですか。女のカウンセラーにわかってもらえなくても、N 先生にわかってもらえば……。まあ、國友さんが悩まなくなったら、本を書くネタもなくなるから、それでいいじゃないですか」と彼は力強く言ってくれた。

そうだ。全ての人に理解してもらおうと思うから、余計に俺のイライラは募る。女性のカウンセラーが男の痛みなんかわかるわけがないのだ。男に生理痛や陣痛がわからないのと一緒だ。

彼は公明正大で豪放磊落である。変にぼくに同調するわけでもなく、反論するわけでもなく、ぼくのことを受け止めてくれる。彼と話すといつだって、新たな発見があるのだ。彼にも感謝である。

5．　マン・デート
男の握手をした日

東京への小旅行の最後、かつて京都にいらした鍼灸の先生の治療を受けに行った。一年に一度、この先生の治療を受けるのが年中行事になってきた。京都で治療を受けていた時がとてもよかったので、東京に移られても、この先生との関係は断ちたくなかった。

そうそう、鍼灸の時の治療着もこの頃は羞恥心を傷付けないような配慮がされている。鍼灸は身体に鍼をさすわけだから、当然、上半身は裸になるのだが、この頃は胸と背中の両方が開けられる治療着が用意されていて、完全に脱がなくても治療ができるようになっている。

今回もたっぷりやってもらった。治療が終わった後、すぐに東京駅から京都に帰るので、先生はわざわざバス停までついてきてくれた。

東京での息抜きが終わって、これからまた京都での生活が始まる。俺には京都があるんだし、俺の遠い先祖は滋賀だと聞いている。滋賀は京都の文化圏だ。先祖が、九州から京都に子孫を呼び戻すために、俺を九州嫌いにしたのかもしれないのだ。そう思えばいい。

鍼灸の先生とは、男同士の固い握手を交わして別れた。この先生の握手はすごく好きだ。力強くて、男の握手っていう感じがするからである。この先生の友情にもすごく感謝している。

6．ブロマンス

かつての教え子、海水浴にいった友人、川遊びに行った友人、東京の力強い友人、鍼灸の先生。ぼくは、それぞれにぼくの二冊目の単著『BL 時代の男子学　21 世紀のハリウッド映画に見るブロマンス』（SCREEN 新書）という本を贈呈した。

ブロマンスを、ラブロマンスの誤植だと思った人もいるみたいなのだが、ブロマンスとは最近できた言葉で、ブラザー（兄弟）とロマンスの合成語。すなわち、男同士の兄弟のような友情をさす言葉である。ブロマンスな関係の男たちは、ゲイではないけども、マン・デート（男同士のデート）をするのだが、マン・デートとは、仕事やスポーツではなく、お互いにテーブルをはさんで話したりするような親密な男同士の付き合いをさしている。

ぼくにはマン・デートできる男性は、ここで書いた人のほかにもたくさんいる。なんと俺は幸せなんだろうと思う。カウンセラーが理解してくれなくても、彼らは少なくともぼくのことを受け入れてくれる。

ぼくは家族がいないので、誰の居場所にもなったことがない。また九州を憎んでいるため、帰る故郷もない。だけど、こうやって、つきあってくれる男たちがいる。子供の頃友達がいなかったぼくは、今になって遅れてきたブロマンスを謳歌できるのだ。

俺の人生はこれでいいんだと思わなきゃいけない。九州での忌わしい少年時代。映画だけが唯一の救いだった。それがあったことで、今や映画の本が出せる身になった。これで 2 冊目だ。俺の人生はこれでいいんだと思わなきゃいけない。誰も、京都から俺を追い出すやつはいないだろう。もう 30 年以上も暮らしている。京都のほうが長いのだ。

7．お風呂でブロマンス

さて、アメリカではブロマンス映画が量産されている。それはぼくの本のなかで書いているので参照して欲しい。

今回、この原稿を書くにあたって、日本のブロマンス映画は？と考えてみた。日本だって、男の友情の話はたくさんある。しかし、厳密にブロマンスの定義にはまる映画があるだろうか。詳しくは、hardtoexplain というサイトを参照して欲しいのだが、アメリカのブロマンス映画とは、かつての西部劇やギャングものとは一線を画す、「マッチョなストイシズム」のない映画と定義されている。しかも、スポーツや仕事などのホモソーシャルな世界とは別の、男同士の親密さを描いた映画である。したがって、日本の任侠ものや時代劇や刑事ものは、男同士の話ではあっても、男のストイシズムがあるので、ブロマンスとは言えない。『ウォーター・ボーイズ』（矢口史靖監督・2001）や『おっぱいバレー』（羽住英一郎監督・2009）などは微笑ましい若い男の子たちの物語だが、スポーツを介しているところが、ブロマンスの定義とは外れる。

『おこげ』（中島丈博監督・1992）『渚のシンドバッド』（橋口亮輔監督・1995）『ハッシュ！』（橋口亮輔監督・2001）『メゾン・ド・ヒミコ』（犬童一心監督・2005）などは、ゲイの話であり、ブロマンスはセックスがからまないので、これまたブロマンスの定義からは厳密にははずれるということになる。

さあ、何があるだろうと考えているうちに、今回も忙しくて、ネタになる映画を探している暇がない（笑）。この頃、この連載、たるん

できている。最初の頃は、映画の分析を張りきってやっていたのだが、忙しさに追われて、いつの間にか、映画はつけ足しにしてぼくの随想を綴っていくようなふうになってきて、そろそろリニューアルしなくてはと考えている最中なのだ。

これまで連載を続けてきて、日本映画を繰り返し見ながらわかってきたことは、やはり日本はアメリカに比べればマッチョではないということ。したがって、男性論の本を書くのもアメリカとは違った角度から書かなくては合わなくなってしまう。元々ぼくはアメリカが専門で、日本文化の専門家ではないので、このところたるんできたのは、大目に見て欲しい。

とりあえず、今回は大ヒットとなった風呂映画『テルマエ・ロマエ』(武内英樹監督・2012)がぼくは大好きだというところで締めたいと思う。ちなみに今回ぼくがブロマンス的な仲にいる友達のことを何人も書いたが、いずれもぼくと風呂などに入った経験のある人たちなので、お互いの裸を知っている。しかし、ぼくたちはゲイ関係ではない。

前に外国人留学生のクラスをもったときに、よく日本人はあれだけ他人と風呂に入るものだと言われたことを覚えている。国にもよるのだろうが、国によっては、人前で肌をさらすことを極端に嫌う人もいるのである。ちょっとこじつけだけど、日本人は風呂でお互いに裸の付き合いをすることで、ブロマンス的な欲望を昇華しているのかもしれない。「だいこんの花」という有名なテレビドラマがあるが、このドラマで、森繁久弥と竹脇無我がお風呂で語り合う場面は有名である。ぼくも大好きな場面だ。

『テルマエ・ロマエ』くらい、楽しく男の裸をとった映画というのはそうそうあるものじゃない。アメリカで、男が裸になるときは、もっとマッチョなシチュエーションであり、戦いなどがからんでいるのだが、日本人は微笑ましいシチュエーションで、男同士裸になるようだ。このことに関しては、これからもっと考察を深めたいと思う。

一緒にお風呂に入れば、心も身体も癒える。男の痛みも男同士で分かち合えるということか。男は痛い！　でも男同士でお風呂に入れば痛みは流れる。日本のブロマンスは風呂にあり。強引な落ちだね（笑）。